

Title	D. シェーンボウム著, 大島通義・大島かおり訳 ヒットラーの社会革命 : 1933-39年のナチ・ドイツにおける階級とステイタス
Sub Title	David Schoenbaum, Hitler's social revolution : class and status in Nazi Germany 1933-1939, Weidenfeld and Nicolson, 1967
Author	蔭山, 宏(Kageyama, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.6 (1978. 12) ,p.1047(135)- 1050(138)
JaLC DOI	10.14991/001.19781201-0135
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19781201-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

D. シェーンボウム著
大島通義・大島かおり訳

『ヒットラーの社会革命
—1933～39年のナチ・ドイツにおける階級
とステイタス—』

本訳書の構成は次のとおりである。

まえがき

序論

第一章 第三帝国とその社会的約束

第二章 第三帝国とその社会的イデオロギー

第三章 第三帝国と労働

第四章 第三帝国と経済

第五章 第三帝国と農業

第六章 第三帝国と女性

第七章 第三帝国と国家

第八章 第三帝国と社会的機会

第九章 第三帝国と社会

著者シェーンボウムは本書をナチス期の「社会史」的研究とよんでいるが、かれの取りあげている時期はナチス期全体ではなく、主として1933年から第2次大戦の勃発した1939年にいたる時期にすぎない。資料上の制約を別にすれば、この時期だけを扱う理由は次の二点に要約されている。(1)1939年から1945年の間に生じたことは、それ以前の1933年から1939年の間に生じたことの単なる延長にすぎないこと、そればかりか(2)第二次大戦後のドイツ社会の質と構造はこの時期になされた決定によって根底的に規定されていること、以上の二点である。シェーンボウムは1933年から1939年の時期によって第三帝国を代表させ、先に紹介した順序で論じていく。

国際的に広く読まれ、ナチスを論じるに際して殆んど必ずといってよいほど言及される本書は、これまで主として二つの面から関心を集めてきた。

第一に、本書はナチス期の「社会史」的研究として注目された。それまでの代表的なナチス社会論としてはフランツ・ノイマンの『ビヒモス』をあげることができようが、本書はそれとはかなり性格の異なる著作である。シェーンボウムは代表的なナチス社会論として、ノイマンの階級社会論(参照前掲書)とエミール・レーデラーの無階級社会論(参照『大衆の国家』)とを

念頭におきつつ、それらとは違ったいわば第三の方位にナチス社会論を展開していこうとしたのである。その際かれの分析方法は「社会史」研究と銘打たれた。本書の刊行も大きな刺激となつて、本書以後とりわけ1970年代に入ってからこの方向での研究はかなり進展していった。包括的研究としてはリチャード・グルンベルガーの著作があるし、また個別分野、個別地域に関する詳細な研究も西ドイツの「社会史」研究グループを中心としてすすめられている。

第2に、本書は近代化論との関連で注目を集めた。この方面での代表的研究であるラルフ・ダーレンドルフの『ドイツにおける社会と民主主義』(1965年)と同様に、シェーンボウムは本書で事実上近代化論と同じ方位の主張をしている。ノイマンともレーデラーとも違う第3の方位の追求が結果的にそこにおちついたのであってよいだろう。

確かに、本書における個々の主張、及びその論拠として列挙されている素材は近代化論の方位にある、といつても間違いではない。しかしそれは結果的にそうだったまでのことであり、これら二つの関心とは別に、かれの「社会史」研究を支える研究視角、すなわちサブタイトルにもみられる「階級とステイタス」に着目し、その実態を解明した著作としてこそ本書は読まれるべきだ、というのが評者の読後感である。内容も多岐にわたる本書を、以下この視角から大筋だけ紹介したい。

シェーンボウムは既成のナチス社会論のうちで、ノイマンとレーデラーのナチス社会論に対しては「これまでのもののうち最も興味をそそる部類に属」する、と一応の敬意は払っているものの、同時にそれらは「最も信頼できないもの」でもある、とのべている。一体何故なのか。

シェーンボウムは、かれらには「情報を解釈するための適切な概念」が欠けていた、と批判する。かれはそうした概念として「社会革命」とか「二重革命」を考えているようだ。第三帝国において「社会革命」がおこなわれたのは自明のことだ、とかれは考えているが、この「社会革命」の概念についてわれわれは当面次の点に注意する必要がある。

第一に、かれの「革命」概念の特殊性である。近代国家のもたらした政治的解放の意義と限界を画定したうえで、その観念的・形式的解放を現実的・具体的解放へと転換する点に「社会革命」の意味を求めるカー

ル・マルクスの用語法とも、ナチズムを「反革命」の代表的事例ととらえる丸山真男の用語法とも著しく異なっている。

第二に、〈意図せざる結果〉としてもたらされた「社会革命」だ、という点である。〈意図せざる結果〉がうまれるのは歴史上決してめずらしいことではないが、この点でも第三帝国はユニークであった。〈意図せざる結果〉をうみだす歴史のパラドックスについて言及される場合、「意図」に合致する実践がなされたにもかかわらず、その意図に反するような事態が生じてしまった消息が問題とされるのが普通である。これに対し第三帝国においても「意図」に合致するような実践がなされなかったわけではないが、基本的にはなされたことの多くは「意図」と無縁だったといわざるを得ない。――

このようなシェーンボウムの主張に接すると、それでは第三帝国において、ナチスの「意図」、イデオロギーはそもそも如何なる意味をもっていたのか、またはもちえたのか、と評者は考えざるをえなかった。

そのような疑問に対するシェーンボウムなりの答えが、「二重革命」論なのである。したがって指摘すべき第三の特質は、かれの「社会革命」論が「二重革命」論との関連で提起されているという点である。かれ自身序論の中で本書の課題を第三帝国が「二重革命」であったことを論証する点に求めているので、以下さらに問題をしぼり、この点に即してかれの論旨を整理してゆきたい。そしてそのことがまた、一体何故第三帝国において「社会革命」が生じえたのかという問題にこたえることにもなるのである。

しかし、シェーンボウム自身序論の中で本書の意図を説明してはいるものの、本書全体の主張を読みとるのは決して容易なことではない。かれはしきりに数字をあげていろいろな事実を紹介し説明しており、この点にはなほ興味深いのだが、それら個々の事実、個々の説明が本書の基本的意図とどのように関係しているのかは必ずしも明確になっているとはいえない。

評者の理解では、当面の問題に関するシェーンボウムの主張として、さしあたりまず次の二点が指摘すべきであろう。第一に、第三帝国が基本的には〈工業社会の論理〉に適應しえた点である。いや「適應」という表現は恐らくまだなまぬるい。第三帝国は単に〈工業社会の論理〉に適應しただけでなく、それをラディカルに促進しえた。すなわち、第三帝国は工業社会への古典的な階層移動過程の第1段階と第2段階

を一挙にラディカルに促進し、70万の農業労働者とその家族を農村から離脱させると同時に、数万人の人々をサービス業やホワイトカラーの職種に吸収したのである。

しかし1920年代、1930年代の特殊な歴史的状況において工業化（それは傾向的には前世紀より一貫してみられた事態である）をラディカルに促進すれば、当然さまざまな社会問題をうみだすことになる。〈工業社会の論理〉にただ適應していくだけでは抜け落ちてしまう問題がでてくる、といってもよかろう。そのような問題の中から、シェーンボウムはとりわけ中間層の問題と「ステイタス」の問題を重点的に取りあげているようだ。本書のサブタイトルに「階級とステイタス」とあり、またシェーンボウムがノイマンやレーダーのナチス社会論に対し自らの研究の独自性を主張していることを考えあわせれば、かれの研究視角の独自性はすぐれて「ステイタス」の問題に着目した点にある、と考えるべきだろう。

〈工業社会の論理〉にただ適應していくだけではスリップしてしまう、中間層の問題や「ステイタス」の問題に対応する役割をはたしたのが、とりわけナチスにおけるイデオロギー的側面である。実際ナチスのイデオロギーが中間層の社会意識、社会的利害に対応していたこと、「ステイタス」の問題にきわめて敏感だったことは本書の到るところで指摘されている。

しかし、このイデオロギーの実際の機能についてはこういわれている。

「ドイツの歴史の首尾一貫した延長としての第三帝国は、客観的な社会の現実とその解釈との間に歴史的に存在していた食い違いを引き続き存続させた。客観的な社会の現実、国民社会主義の統計的に測りうる結果は、ヒットラーが恐らく約束し、彼の信奉者の大多数がその実行をかれに期待したものと、まさに正反対だった」

ヒットラーにしろ、シュトラッサー兄弟の場合にしろ、ナチのイデオロギーは明らかに反工業社会的な反モダニズムであった。それは政権につく以前（「闘争期」）のナチにスつて妥当するだけではない。ナチス政権のもとで工業化が急激に進展している時においてすら、かれらの反工業社会的イデオロギーは捨て去られることなく宣伝され続けたのである。だが基本的動向に注目する限り、そのイデオロギーの約束に反して事態は進展していった。すなわち第三帝国においては、都市は肥大化し、農村人口は減少、女は家庭に入るところ

か事務所や工場に進出し、また収入や富の分配の不平等はかえって増大した。工場労働者の暮しむきは比較的よかったのに、中小企業はますます苦境におこまれた、といった次第である。

もちろん、だからといってイデオロギーにおける「ステイタス」や中間層への配慮がまったく無意味だったわけではなく、現実の世界においても一定程度の成果はおさめているのである。そうした個々の事例は本書の中でいろいろ紹介されている。しかし個々の具体的ケースにおいてナチス・イデオロギーが成果をあげたことにもまして重要なことは、第三帝国において「現実の世界」とは区別された「ナチの世界」が相対的独自性をもって存在しえた点にあるだろう。

「それは社会的重力の法則を新しいものと置き代えることなしに無視した世界だった。平均的市民は、受身であろうと積極的であろうと、伝統的な諸関係と諸勢力とステイタスの世界に生きていると同時に、制服かバッジをつければたちまちそうしたものが無効となってしまうようなナチの世界に生きていた」

いつの時代においても「現実の世界」とは区別されたもう一つの別の世界が追求されることはありうるし、ある程度の支持をえることも可能である。しかしこの点第三帝国はきわめてユニークだった。一方では、確固とした「現実の世界」があり、そこではブルジョワ的な工業社会が実現されているのに、他方では、そうした「現実の世界」を無効にしてしまうような反工業社会的なもう一つの別の世界＝「ナチの世界」があり、しかもそこに公的な正当性が与えられていたのである。

ただし念のためにふれておくと、この「ナチの世界」は相当程度まであいまいな世界であった。たとえば「ナチの世界」において言葉の上での革命がなしとげられはしたが、それらは本質的な社会的変化と無縁であったし、そこでの「革命」とか「社会主義」とかいう基本的用語にしても明確に定義されていたわけではなかった。党綱領も雑多な利害の寄せ集めであり、社会的平等主義とエリート主義との間の根本的矛盾を含んでおり、だからこそ「ナチの世界」に発する、本来の意味で「政策」とよべるに値するものは殆んどなく、第三帝国において労働者の「ステイタス」に変化がみられたのも、かれらが合目的な「政策」を追求した帰結であるというよりも、当時の経済状況一般におうところが大きかったのである。

それはともかく、「現実の世界」と「ナチの世界」

とを基本的には相互に無縁なまま共存させえた（「二重革命」）ところに第三帝国の独自性があった。「現実の世界」と「ナチの世界」とが相互に拮抗していた世界は、旧来の理論によっては解釈しえない新しい世界であり、誰もが混乱し当惑していた世界なのであった。政治的対立といえは階級闘争のことを考えがちなこの社会にあって、旧来の対立形式は姿を消したようにみえ、そのかわりにこれまでのそうした対立は従来とは非常に異なったさまざまな形をとるようになった。このような究極的な方向喪失の社会的結果として、客観的な社会の現実とその解釈の間に存する食い違いが第三帝国を通じてみられることになったのである。

第三帝国においては、かつてはみられた「社会階級とステイタスとの相対的近似性」が消失し、たとえば何が上位で何が下位なのかを示す信頼にたる尺度はなくなってしまった。また党と国家の旧来の関係も崩壊して混沌と化し、「イデオロギー革命と工業化革命との衝突」の中で、伝統的な階級構造はくずれ去り、それとともに伝統的な政治構造も崩壊してしまった。第三帝国ではどの社会集団も繁栄を謳歌しはしなかったし、どの社会集団もひどい目ばかりにあうということではなかった。それはナチ政治と資本主義経済の二重国家であるよりも、むしろ集団と個人双方の「ステイタス」がかつての客観的基盤を離れて勝手に移動するという二重社会なのであった。

シェーンボウム自身の定義によれば、「二重革命」とは手段と目的の革命を意味している。目的の面、すなわちイデオロギーの面からみると、第三帝国は反「ブルジョワ的工業社会」を主張し、他方手段の面からみると、第三帝国は「ブルジョワ的かつ工業的」な革命をもたらした。それも「明確に資本主義的で明確に工業化され、基本的に民主的なドイツ連邦共和国という事後の証拠」によって、われわれは第三帝国において「手段の革命」がおこなわれたことを知ることができる、というのである。

敗戦と被占領下の特殊な歴史的状況から生まれたドイツ連邦共和国という「事後の証拠」から第三帝国における「革命」を云々するのは、それ自体問題であろうが、より根本的な問題は第三帝国における「変革」の実態がどのように把握され、説明されているかにある。

実態把握についていえば、本書刊行以後、個別分野、個別地域に関する研究は本書よりも手がたい手法です

すめられている(雑誌に限っていえば Archiv für Sozialgeschichte 誌や Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte 誌などに関連論文が多い)し、またシュヴァイツァーやメイソンの批判的研究もあらわれている。しかしだからといって本書でシェーンボウムが提起した、ナチス社会を「階級とステイタス」の観点から分析する研究視角の重要性まで減じるわけではない。この視角にたつて、第三帝国において「二重革命」がおこなわれたこと、その結果、従来の理論によっては把握しえない状況が生まれたことを主張する本書は——訳者もいわれているように——今なお問題提起の書としての意味を失っていないといえよう。とくに日本において殆んど未開拓であるナチス社会の研究に際してシェーンボウムの研究視角は重要な役割をはたしうるはずであり、われわれは本書をその最大のメリット以外のところで「克服」してしまってはならないであろう。

最後に本書の問題点をあげておこう。シェーンボウムの「二重革命」論は手段と目的の革命、「現実の世界」と「ナチの世界」における相互に反対の方向性をもつ「革命」の結びつきとしてとらえられているわけだが、その結びつきの在り方、両世界の関連の説明が十分になされているとはいえない。魅力ある主張だけに惜しまれるところである。

蔭 山 宏

(慶應義塾大学法学部専任講師)

鈴木鴻一郎

『一途の人—東大の経済学者たち』

水田洋『ある精神の軌跡』

随想を読むのは楽しい。随想を書くこともまた楽しいはずだが、残念ながらその楽しみがわかるほど書いた経験がないので、今のところは何ともいうことができない。

私にとって随想を読むことの楽しさの意味は、専門書を読むことや原稿の執筆に疲れたとき、座右にこれをおいて時折開き、つい面白くなってひき込まれてしまうことのうちにある。随想といってもいろいろあるが、自叙伝風のものや自分の体験あるいは思想の遍歴を語るものに私はよりひきつけられる。鈴木鴻一郎、水田洋両教授の御著書は、お二人が高名な経済学者であり、筆者の専攻に近いこともあって、きわめて興味

深く読ませていただいた。もちろんおなじく自己を語りながら、この二書には大きな違いがあることを読了後感じた次第である。

『一途の人』は、副題にもあるように、著者が大原社会問題研究所および東京大学経済学部で奉職中、直接指導あるいは影響をうけられた高野岩三郎、榎田民蔵、大内兵衛、向坂逸郎、宇野弘蔵、矢内原忠雄、舞出長五郎、有沢広巳の諸氏、そしてそのほかに河上肇、楊井克巳、岡崎三郎および武田隆夫の諸氏をも語っておられる。

著者はその誠実なお人柄の故にか、このいずれの方々からもそれぞれさまざまな面で指導され、あるいは感化をうけたことを率直に語っておられる。しかし何といっても宇野弘蔵、大内兵衛および高野岩三郎の三先生の影響が圧倒的であったことが感じられる。誤まりをおそれずにいえば、著者は、高野さんからは学問研究における囚われざる精神を、大内さんからはマルクス主義者としての誠実さを、そして宇野さんからは経済学者としての理論的な厳密性の追求を、貪慾に学ばれたに違いない。そしてさらにこれら12人の方々と語り、そのいわば共通項として、『一途の人』を導き出され、しかもこれらの方々と語りながら、実は著者自身を語っている点で、この試みは成功しているといえよう。

しかし私は本書について、つぎのような感想を抱いている。本書は、著者が折りにふれて書かれた想い出や随想、あるいは追悼文もしくは経済学部長として、退任教授への餞の言葉などから成るといふ制約があるためか、陽の部分が多すぎて、陰の部分、すなわち著者ご自身の主体的なコメントが非常に少ないことである。恩師や先学への限りない敬慕と一体感が滲み出ている、それはそれなりに胸を打つが、戦前から戦後にかけての長いパースペクティブのなかで、これらの先学の業績を再検討し、日本経済学史上における役割を明らかにするという姿勢もまた重要ではないだろうか。

とりわけ宇野理論について感ずることであるが、宇野先生は、『社会科学の根本問題』、青木書店、1966年の第3部で、「リストとヴェーバー」をとりあげ、ヴェーバーの『理想型』を批判する形で論理を展開しておられる。私は、宇野理論なるものは、ヴェーバーの社会科学方法論から非常に多くのものを学んでいるように思われる。しかしそのことを宇野さんは認めないように思われる。この点、すなわち「マルクスとヴェーバー」にかんする問題関心を深めることなく